令和３年度
沖縄県医事功労者県知事表彰を受賞して

沖縄県立宮古病院　本永　英治

昭和57年３月に自治医科大学医学部卒業後、令和４年３月31日で40年になる。沖縄県立中部病院研修に始まり、伊是名島の診療所、西表島の西部診療所、石垣島の県立八重山病院、最後は故郷宮古島の県立宮古病院で公務を終了することができた。40年間の中で初期研修２年、後期研修１年、専門医研修３年と研修に当てた期間は６年間で、残りの34年間は離島で医療活動をしてきたことになる。数々の思い出がある中で、やはり伊是名島２年間、西表島３年間は思い出深く、医療の原点・本質とは何か、を離島医療経験を通して考える場面に多く遭遇できた。そのことは、私にとって宝の原石を見つけ、そしてその原石をどのように磨こうかと思考する手掛かりとなり、その後八重山病院、東海大学大磯病院、宮古病院の勤務を通して、医療の原点・本質とは何か、との問いに明確に自分自身の頭の中で言語化できたことは、何事にも例えることのできないほどの喜ばしいことであった。

またこれまでの40年間で３回の全身麻酔による手術を受け、それを乗り越え今日まで無事に業務遂行できたのも私にとっては心から喜ばしいことであった。

医学部時代には、長野県和合村無医村診療所で勤務する金子勇先生を師として仰ぎ、また同じく京都西陣の下町で診療する早川一光先生の住民医療の考え方に共感し、医師になってか

表彰状

本永英治殿

あなたは多年にわたり医療業務に従事し本県の保健医療の向上発展に貢献されその功績は誠に顕著であります

よってこれを表彰します

令和三年十二月十六日

沖縄県知事　玉城デニー

沖縄県

らは分子生物学を知とする元物理学教授の三石巌先生と知り合いになり、その幅広い世界観に惹かれて自分自身の哲学や思想を構築できたこと、そして三石巌先生には、西表西部診療所の勤務が決まった時に、「僻地に行くことは必ず人生の糧になる」と背中を押され祝福を受けたことなど、離島においても3名の師がいつでも傍にいるような気がして充実した離島での医療活動ができたことは今でも心から感謝している。

故郷宮古島に戻ってからは県立宮古病院に勤務し、あっという間に24年が経過した。宮古病院での自分自身の役割を自覚しながら、病院管理者として多くの職員と協力しながら、多くの事業をこなしてきた。医療活動の傍ら、宮古方言、宮古民謡、琉球の自然などにも愛着を持ち時間を見つけ約20年間継続活動そして学習してきた。故郷宮古島で仕事ができたこと、信頼できる同僚と仕事ができたこと、宮古島の住民と色々と関係ができたことは最高に幸せなことであった。

現在90歳近い高齢者らと宮古方言で直接電話でのやりとりができるようになった。そのやりとりのその瞬間に心から嬉しさを感じている。

＜主な経歴＞

官公庁関係歴

昭和57年　5月	沖縄県立中部病院 初期研修
昭和59年　4月	沖縄県立名護病院附属伊是名診療所
昭和61年　4月	沖縄県医務課所属県立中部病院 出向
昭和62年　4月	沖縄県立八重山病院附属西表西部診療所
平成　2年　4月	沖縄県立八重山病院 理学診療科兼内科
平成　7年　4月	東海大学附属大磯病院 リハビリテーション科
平成10年　4月	沖縄県立宮古病院 リハビリテーション科 医長
平成13年　4月	沖縄県立宮古病院 リハビリテーション科 部長
平成16年　4月	沖縄県立宮古病院 医療部長
平成23年　4月	沖縄県立宮古病院 副院長兼医療部長
平成25年　4月	沖縄県立宮古病院 副院長
平成29年　4月	沖縄県立宮古病院 院長
令和　4年　3月	沖縄県立宮古病院 院長 退任 現在に至る